

# 沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

(5)

私は沖縄戦を体験していた。第9巻と第10巻を読み比べれば明々白々だが、第9巻は座談会方式を中心に話し手の録音テープを文字起こした証言に、小見出しをつけるなどの編集は行われていない。第10巻は、調査執筆者が個々の話し手の証言に小見出しを立て、読みやすくするという編集を行っている。

若手中心

琉球政府時代に企画され、琉球政府立沖縄史料編集所(復帰後は沖縄県立)で編集発行された沖縄県史24巻のうち、3巻も沖縄戦関係が占めていた。第8巻が沖縄戦通史で第9巻、第10巻は住民の沖縄戦体験記に充てられている。第10巻は安

仁屋政昭所長の方針に任されることになった。従って、71年に発行された第9巻は、沖縄戦の激戦場だった中南部を中心に座談会方式で収録されている。第10巻は、第9巻では調査収録されていない沖縄の北部・本島離島などや宮古・八重山地域を若手の教員らが中心になって調査執筆することになった。

## 県史の調査執筆

まさにそのタイミングで私は沖縄の国際大学で教員生活スタートすることに。安仁屋政昭さんに大学友の儀部豊俊さんから、私が沖縄戦体験に関心をもっていることが伝わった。私に調査執筆の依頼を受けることになったのである。

先輩との旅

それから半年後の70年暮、儀部さん、安仁屋さん、仲地哲夫さんと新参の私の4人は、庶民の沖縄戦体験聞き取りの視点を共有するため、沖縄本島北部と伊江島を数日間調査旅行することになった。

この聞き取りの視点を共有する旅の成果は、『沖縄県史』第10巻(74年3月)で安仁屋さん執筆の「総説

にも渡って、土地闘争で有名な阿波根島湯さんから聞き取りをしたことである。阿波根さんの、キューバ移民、日本軍のスパイ視、慶良間の強制移動、渡嘉敷島赤松隊の伊江村民虐殺など多岐にわたる体験を聞いて、宿で感想を述べあったのは相当内容が深かったような印象である。

「伊平屋島に赴任していた某特務教員などは、沖縄の復帰後再び沖縄にやってきた教育機関の枢要の地位についている」「戦後、沖縄においては、戦争責任の追及はきわめて一面的なとりあげかたとしてしかなされてこなかった。それは被害を受けたという側面からのものであったが、渡嘉敷島の赤松隊や久米島の鹿山事件などにみるように、特定の個人を糾弾するというやり方で、言葉をかえていえば、個人的なうらみつらみを晴らす形でしかとりあげられなかった」「戦争責任問題の一つの現れとして、敗戦直後の『一億総さんげ』論がなえられたことがあった。その特徴は、ぎんげの内容が敗戦の原因(責任)に限られていたこと、そして戦争指導者と一般国民とにたいして無差別に『さんげ』を要求していることにある。このことば、つきつめれば、太平洋

戦争を二応肯定した上で、敗戦の責任を免罪にする論理が伏在していたといわねばならない」(1108頁、1109頁)。

学際的

# 歴史学の視点学ぶ

## 北部、伊江で庶民の体験聞く

体験していない新米教員に戦争体験の聞き取りに傾注させたいという意気込みが伝わってきた。さっそく、那覇市史編集室の方に紹介され、「これから県史で頑張っていく人だから、那覇市史やいろいろな資料に残っているのは、伊江島

庶民の戦争体験記録について」に盛り込まれているはずだ。検討し合った詳細は記憶していないが、私がその後聞き取りした内容があるので、以下のようなことを話題にしていたと思われる。

「激戦地の凄惨な場面にのみ眼をうばわれて、戦争における庶民生活の苦悩にみちた諸様相が見落とされがちである」「また、交通の途絶した離島における食糧難やマラリアなどの疫病による犠牲者のいたましい

私はその後、県史執筆仲間となった大城さんの情報をもとに75年から2000年まで学生と断続的に平和教育の拠点となった系数アブチラガマの調査をするということになった。(沖縄国際大学名誉教授)(次回回は、あす掲載)

## 各界で「沖縄戦後史」発行ブーム

### 社史や労働、国体史も

#### 苦渋の歩みを後世に



27年を総括する

## 黒人MP団

監禁の白人

「沖縄戦後史」発行ブームを報じる1972年4月17日付琉球新報朝刊。県史の編集を進める沖縄史料編集所の様子も紹介されている



1974年に発行された「沖縄県史第10巻」